シンポジウムⅠ－２

大分大学によるサンラザロ病院における学生感染症実習に対する取り組み

山城 哲[1]　西園 晃[2]　門田 淳一[2]　三舟 求眞人[3]
大分大学 総合科学研究支援センター[1]　大分大学医学部感染分子病態制御講座[2]
大分県厚生連鶴見病院[3]

【背景】大分大学医学部は医学部学生教育の一環として，日本ではまれな感染症を熱帯地で実地に学習することを目的としたユニークな学生教育を２００３年度より実施している．２００１年大分医科大学（当時）はフィリピン国立感染症専門病院であるサンラザロ病院（SLH）との間に，学生への感染症教育の実施および職員間の共同研究の促進を目的とした学術協定を締結し，それが本活動の根拠となっている．活動の直接的な目的は学生の感染症教育であるが，それを通じて感染症の分野で大学の特色の一つを出して行きたいという意志が背景にある．本活動の特色として，１．医学部正規の活動の一環として実施していること，２．医学部側が学生の事前教育，教官による引率，ワクチン接種などの補助を行っていること，３．事前にSLH側スタッフと実習内容に関する十分な打ち合わせを行うこと，４．チュートリアル教育との連関を図る意図があること，５．マスコミ等を通じ社会の注目を集めたことなどがある．
【活動の概要】２００３年度に実施した本活動の概要を記す．１１月９日より２週間の日程で学生（４年生，臨床実習前）９人，教官３人，事務官１人が参加した．午前中はSLH内病棟（９病棟）での実習を２～３人の小グループ単位によるローテーション方式で行った．午後は感染症専門医による講義（７回）を全員で受講した．実習効率を上げるために出発前に感染症に関する事前講義，診断学実習，英語によるプレゼンテーションの準備を大分大学８施設の協力を得て行った．参加者全員に適切だと思われたワクチンを接種し，また旅行者保険に加入した．より良い活動にするため活動に関する評価を双方向的に実施した．SLHスタッフから参加学生への活動評価は，実習内容の理解度，活動への意欲の２項目とも高いスコアであった．一方参加学生からSLHスタッフの教育法に対する評価は病棟における実習および感染症講義ともに高いスコアであった．参加した学生は２週間で３１種類の疾患，症候を実地に学習した．各学生とも典型的な症状を有する患者２症例のレポートを作成した．また患者および活動に関する映像情報，プレゼンテーション資料，SLHスタッフによる講義資料などをまとめた．
【結論および提言】SLHにおける学生感染症実習は短期間で学生に感染症学習の機会を与える観点，または学習の動機付けの観点から効果的であると思われた．永続的な活動にするための課題として，役に立つ実践的な内容を学生に提供する事，参加する大学教官およびSLHスタッフへの適切な動機付けを図る事，看護学生の参加を模索する事，社会に積極的に発信する事などが重要であろう．

Activities of the student rotation program in San Lazaro Hospital, 2003

TETSU YAMASHIRO
Institute of Scientific Research, Oita University, Oita, Japan